

京都大学教育研究振興財団助成事業  
成 果 報 告 書

平成24年11月 1日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団  
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 情報学研究科システム科学専攻

職 名・学 年 修士課程2年

氏 名 内 藤 浩 介

助成の種類	平成24年度 ・ 国際研究集会発表助成 (Ⅱ)		
研究集会名	TRIZ未来会議2012 TRIZ Future Conference 2012		
発表題目	Design Support Method for Implementing Benefit of Inconvenience inspired by TRIZ		
開催場所	ポルトガル・リスボン・ノーヴァ デ リスボン大学 (The New University of Lisbon)		
渡航期間	平成24年10月24日 ~ 平成24年10月26日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有( )		
会計報告	交付を受けた助成金額	200,000円	
	使用した助成金額	200,000円	
	返納すべき助成金額	0円	
	助成金の使途内訳	航空運賃	145,400円
		宿泊料	24,044円
参加費		26,833円	
交通費(一部)		3,723円	
当財団の助成について			

報告者は2012年10月24日から26日の3日間、ポルトガルのリスボンで行われたTRIZ Future Conference 2012に参加し、口頭発表を行った。

### 【会議の概要】

TRIZ Future Conference は、体系的技術革新のプロセスと、発明的問題解決の理論であるTRIZ (Theory of Solving Inventive Problems) の効果的な利用、研究活動、および関連する産業界・教育界への応用に関する年一回の会議であり、幅広い分野の研究成果がヨーロッパ各国で発表される。会議の目的は、体系的技術革新の経験を共有し、TRIZに関わる企業、研究センター、教育機関、個人を結びつけることである。12回目の開催となった本会議では、学術的なもの、実践的なもの合わせて80件ほどの発表が行われ、TRIZ コミュニティによる最新の成果と、産業界との共同・発展による新しいアイデアと知識ベースの技術革新の融合が図られた。ヨーロッパ各国に加え、米国、日本、韓国、中国、インドなどから、約120名の研究者、企業の技術者などが参加し、3日間、3つの会場で発表が行われた。

### 【研究報告】

報告者は3日目の午前に“Design Support Method for Implementing Benefit of Inconvenience inspired by TRIZ”の題目で口頭発表を行った。発表は20分のプレゼンと10分の質疑応答であった。発表では不便益 (Fuben-eki) という言葉と、その概念を紹介した。発表内容は次の通りである。技術者や設計者による便利の追求は人々の労力を軽減し、生活を容易にし、技術の発展に大きく貢献してきたが、ユーザを疎外し、ユーザの能力を失わせるといった問題を生むことも知られている。一方、不便なシステム・方法はユーザに気づきの機会を与え、創造的な使用法を引き出し、達成感を与えるなどの主観的な益を生む。しかし、そのような益をシステムティックに生み出す方法はいまだ知られていない。そこで、便利さと前述の主観的な益とのトレードオフに注目し、TRIZの方法を導入した。すなわち、不便だからこそその益がある具体事例を分析することによって、不便さとその益を関係付けるいくつかの原理を抽出し、不便益マトリックスと名付けた表に配置した。これはTRIZの矛盾マトリックスに倣ったものである。このマトリックスを用いることで、たとえ不便であっても主観的な益の得られるシステムを直感だけに頼ることなく生み出すことができる。また、このマトリックスを用いて不便の効用を活かすアイデアを発想するプロセスを報告した。

質疑応答では、不便益は禅の思想が背景にあるという感想や、おもしろい、製品開発に考え方を取り入れたいといった肯定的な意見を得ることができ、多くの人に興味を持ってもらえたと感じた。発明によって便利さを追求することが目的のTRIZにおいて、TRIZの手法を用いながらも、あえて不便にすることで得られる主観的な益を導く手法を提案することで、TRIZの新たな利用方法を示すことができたと感じている。

学生として国際学会で発表するという自体も非常に有益な経験であったが、それに加え自分たちの研究が外国の方、産業界の方にも認められるということが分かり、大きな自信を持つことができた。

### 【謝辞】

最後に、本研究発表を行うにあたり、助成を賜りました京都大学教育研究振興財団に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。